

駿河雛人形

○雛人形

雛人形は、江戸時代から志太郡の一部で天神が作られていたのがこの地方の嚆矢であり、菅原道真を祭った桐塑（とうそ）による煉天神が出来、その後衣装を着せた天神が作られ現在まで続いています。

静岡で雛人形が本格的に作られ始めたのは、昭和6～7年（1931～1932）で、雛人形の産地である埼玉県岩槻市や東京都から人形師を招き、技術を導入して生産を始めました。

静岡市商工課の委嘱によって、昭和12年（1937）に藪崎竹次郎は、雛人形15人揃いの作り方講習会を開き、業者の指導にあたりました。

昭和30年代後半から需要の拡大により、衣裳の上半分と下半分を別々に作ることで、分業による生産が可能となり、静岡では量産化が進みました。

駿河雛人形の特徴は、胴柄作りにあり、人形の衣装の柄や色彩に製作者の個性が反映され、その中でも腕折り（振付け）は製作者の個性が最も発揮される部分です。

静岡の雛人形界のただ一つの弱点は、天神などの大きな頭（かしら）は作れても、雛人形のような小さくて精微な頭がほとんど出来なかったことです。

頭の生産は、木地、胡粉塗、面相書き、結髪と分業化し、それぞれ大変根気のいる作業で、静岡人の気質に合わなかったともいわれ、昭和初期から幾度となく職人をスカウトして頭の生産の導入を図りましたが、定着することはありませんでした。

しかし、雛人形の胴の生産は、後進地であったことから先進地に学び、熱心に研究努力したことや静岡の塗師や木工職人などが一か所に集っていた形態を上手に生かして、手工芸の分業専門化量産化が可能となったことで、全国有数の産地となったのです。

駿河雛具・雛人形は、平成6年（1994）伝統的工芸品の指定を受けました。